医事・文談　九百五十三　平岸　三八

《正岡子規（36）の続き》その241
子規と漱石（五十たび続）

青島は特異な景観で有名で、今は観光地として多くの人が訪れるところである。

なぜ節が青島へ行きたがったかというと、同郷の知人の医師が、同地に転地逗留して、肺結核が治癒したと聞いたので、是非そこに行きたいと思ったのである。日光浴が結核にすすめられていた時代である。何しろ喉頭結核にも反射鏡で日光を照射しているのである。今ならお笑草であるが、当時はそれも療法の一つと考えられていたのである。

明治から大正初期にかけては、肺結核に特殊療法はなく、転地が勧められ、なるべく新鮮な空気を呼吸するのがよろしいということであった。

徳富蘆花の小説「不如帰（ほとゝぎす）」の浪子さんも、逗子に転地するのは、その例である。

しかし節の青島行きは失敗であった。肺病患者らしいというので、何軒もの宿屋で宿泊を断られ、やっと取った宿でも、折柄の夏季で海が荒れ不漁の時季で、碌な食餌にありつけず、散々であった。

転地して日光浴など、後年の安静臥床を主とする療法とは全く正反対のことをし、肺結核を悪化させ、その上旅行を続けているのであるから、発熱も日常化してしまった。

そして9月22日またまた福岡に帰ってくるのである。退院後、一ヵ月である。

この頃になると喉頭には嚥下痛があり、発熱、咳嗽が続き、久保教授も手術が内科方面への悪影響を恐れて躊躇するようになるのを、節は手術を強請するように頼み込むのである。

患者が医師、しかも教授に強請するというのも異常だが、節の何としてでも治りたいという意欲がそれをさせたのであろう。

それで電気焼灼を受けた後に、12月9日、懸吊喉頭検査下に手術をして、一部を絞索にて除去したが、術中はげしい咳の発作があり、痰も多量に喀出したと記録される。

発熱と喀痰の量が多いことは、日記にもしばしば書かれている。

病室がなく、病院前の宿屋に起居して通院しているのだが、暖房の設備がなく（この当時も火鉢はあったろうが）寒気に苦しめられたことが、内科の隔離病室ならということで入院がやっと叶うこととなった。それは平野屋（九大医学部前）の通りに面した二階八畳で熱に喘ぎながら大正3年の大晦日を送った、翌大正4年1月4日であった。

大正4年（一九一五）

1月4日、点燈後、人力車で入院。病院は暖かだとそればかりを喜んでいる。

隔離病棟は本院からは非常に遠いのであるが、久保教授、武谷教授も来て診察している。

節自身の日記は、1月8日附で途絶えている。最早、日記をつける気力をも失ったのであろう。

入院以来、喉頭も肺も病症進行し、2月初め郷里茨城県から父源次郎が馳せつけ看護に当ったが、遂に8日早朝から昏睡状態に入り、午前9時40分死戦期に入り、10時永眠した。

カルテは全文ドイツ語で書かれていることは先に述べたが、最後に次の如く書かれている由。

Gerade X A.M. hat er schliesslich ins Himmel gegangen.

節が福岡に来てから、久保より江夫人はしばしば病室にも来、また食料品その他を贈っている。それは次のようなものだ。

九大病院の食餌の粗末なのに対し、日々何か持ってきてあげるとの言（大正3年6月20日、母堂宛書簡）、より江夫人、久保令妹ベゴニア一鉢、福島の桜桃（同21日）、菓子、惣菜（同24日）、桔梗（7月23日、久保令妹）、神戸牛の味噌漬一樽（12月31日）

これらは日記に見えているものだけであるが、見舞を受けたり、教授の診察を時間外にも拘らず、とりはからってくれたり（大正3年6月10日）いろいろ親切にして貰っているのは、ホトトギス同人として、同誌に載った漱石の文を読み識っていて、漱石の紹介による節に特に親しみを感じていたからであろう。

表紙写真

英国片田舎の風景

札幌市医師会　藤田　晃三

春、英国北ウェールズを自動車旅行した時の風景である。コルウインからカーナーボン（ウェールズ王子の居城がある）に向かう途中で国道を南にそれ、小高い丘に向かって細い道を入って行くと、石橋と石造りの民家に出くわした。定年退職後、こうした田舎で余生を送るのが英国人の夢とも聞くが、新緑が映え、なんとも古風でのんびりゆったりした雰囲気である。